中学校・自由

漠然と希望のくじら

松戸市立第三中学校　三年　川口　蓮太朗

漠然としていた。それが率直な感想だった。ただ漠然と、くじらの背に揺られていた。芦沢理帆子に共鳴し、痛み、気付き、ページだけが一枚一枚捲られていく。そんな感覚だった。

『凍りのくじら』に描かれる理帆子の日常は、僕の世界と少し似ていた。どこに居ても息が詰まって、自分の明確な居場所が見出せない。でもそれは、決して深刻な問題ではなくて、蚊に刺された時の痒みのように、薄く、でも長く自分に纏い続けるものだ。彼女はその不快感に対抗するためのように、人を舐め、馬鹿にすることで自分自身を取り繕う。最低なように思えるが、僕には不思議と彼女が理解できた。けれど人を知り、人と深く関わっていくうちに、彼女と僕は思い知る。人間って、恐い。

僕は人の輪に入ることが苦手だ。どこの集団にも行けるのに、どこにも明確な安心感が感じられないから。そんな僕に響いたのは、息詰まっていた理帆子が図書室で出会った、別所あきらの言葉だった。「頭がいい人間ってのは孤独だね。」僕は決して頭がいいわけではないが、現実を見ている、という点では、理帆子とよく似ているかもしれない。人間は色々なことを知り、達観していくに比例して孤独になっていくのだろう。知れば知るほど、見えれば見えるほど、現実に絶望するような瞬間がある。そして、自分の居るべき場所がわからなくなる。

「少し、不在。」理帆子が自身をそう表現したように、僕もどこか日常に現実感を伴っていない。理帆子は、ずっと怯えていた。対峙する現実感と闘っていた。きっと、彼女も僕も恐いのだろう、人が。人と深く関わるということは、現実に強く触れるということだ。普段この世界を理想的なフィクションとして見ているからこそ、そこから出て現実を目にし、絶望するのが恐い。だから相手を見透かした気になって自分を護る。僕も似たようなことをしてきた。気付くと自分が情けない。彼女も僕も、自信がないだけだ。僕は強くなりたい。自分に自信を持ちたい。逃げてばかりじゃいけない。現実と向き合う勇気を持たなきゃいけない。それに気付けたことが、情けなさと矛盾してなんだか嬉しかった。

人が信じられない。これは僕がつくづく悩んでいることのひとつだ。理帆子もそう。僕がもうひとつ心を打たれたのは、そんな理帆子の本心だった。口先の夢ばかりを語って現実を見ない、理帆子の元彼である若尾大紀の彼女に対する執着は悍ましかった。それでも理帆子が彼との関係を続けたがったのは、彼を信じたかったから。本当は、相手を人一倍信じていたい。けれどもそれができないから、達観を武器に先回りして、人を信じられない己を正当化する。またしても、自分が情けない。素直になれないだけじゃないか。

「絶対あいつに大それたことはできない。」高を括っていた理帆子の予想を上回る、人の心理と行動。それを目の当たりにした時、彼女の少し不在な世界は崩れていった。理帆子は、現実感とともにずっと遮断していた「愛」に気付く。大切な人を失って後悔したくない。やっとみつけた小さな幸せを守りたい。完全に彼女と一体化していた僕は、気付く。人は恐ろしい。けれど、自分の現実感を遮断するフィルムを剥がしてくれるのは、人だと。その時僕は、やっと少し不在ではなくなるのだと。「光」だった。理帆子が見たような力強いそれではないけれど、その気付きは確かに、淡く「光」を持っていた。

僕の世界は未だ、妙に現実味の薄い「少し、不在」な世界のままだ。それでも理帆子の世界を追体験し、希望を持った彼女の姿に光をもらった。自分にも、理帆子のようにフィルムを剥がしてくれる人が現れるかもしれない。自分も誰かのフィルムを剥がせるかもしれない。微かな未来への期待。期待という名の、希望。今の僕にとっては、その弱くて僅かな希望が充分な光に感じられる。

漠然としていた。でも今は自分に、着実に実感を持っている。本を閉じた時、ほんの少しだけ世界が明るく見えた気がした。明日から他愛もない人の輪に、無防備で飛び込んでみようかな。そう思えた。恐怖はまだ根強いけれど、無性に誰かに会いたい。

人間って、恐い。だけど、美しい。人を信じること、信頼を築くことは、自分とは程遠いところにあるものだと思っていたけれど、本当はすぐそばにある。この夏、僕が見た期待という名の「光」が、いつか自分を強く、優しく照らしてくれることを願って、僕は今もくじらの背に揺られている。きっとこれから沢山の人と関わり合う中で出逢いがある。人を愛し、人を信じ、独りではなく、誰かとともに光を見出せる人間でありたい。理帆子ができたように、僕もいつの日か、希望で溢れるくじらの背にまたがってみたい。そう淡く、でも確かに願っている。

「凍りのくじら」辻村深月（講談社）